

伝統芸に挑む

■①■

伝統芸の連載企画を始めるにあたって、まず頭に浮かんだのが、福山市光南町の喜多流大島能楽堂だ。以前に取材で訪れた時、能舞台の簡素で凛とした雰囲気と、能楽師の静かだが迫力あるたたずまいに心を奪われた。「これしかない」。そんな思いで、能楽堂の門をたたいた。(向井友理)

大島家当主で、国総合指定重要無形文化財の大島政允さん(66)から教えを受けることに。緊張していると、「もっとと気軽に」と穏やかに話し掛けてくださった。

能は主役を演じる「シテ方」、シテ方と掛け合い物語を進める「ワキ方」、笛や鼓など楽器を担当する「囃子方」に分かれる。大島家の属する「喜多流」は、シテ方の流派の一つで、質実剛健、力強い動きを特徴とする。

「せっかくなので機会だから」と大島さんの妻、泰子さん(63)に勧められ、着物とはかまを身に付け、足袋を履く。背筋がピンと伸びた気がした。

能舞台と同様の約6畳四方

喜多流大島能楽堂

「日本の文化は美しい」



藤井さん(右)に舞の指導をする大島さん(福山市光南町の大島能楽堂で)

構え集中じわり汗

のヒノキ造りのけいこ場で、まずは基本的な「構え」を教わった。かかとをそろえて少し浮かすくらいの気持ちで真浮かせ、丸い大きな物を持つように立ち、体を曲げずに重心を前に倒す。「お尻を突き

出すように」と大島さんからアドバイスを受ける。胸を張り、視線は正面に。腕は軽くし、丸い大きな物を持つように立ち、体を曲げずに重心を前に倒す。「お尻を突き

示されるが、前傾姿勢のためつい下がってしまったり、腰が突き出したりして、なかなか決まらない。立つだけでも苦勞をしたが、何度も繰り返しすうちに集中力が高まる。

とで舞となり、謡と組み合わせ、意味を含ませていくのが能楽師の仕事。精神の集中が問われます」と大島さん。能の動きは、静かなものに見えるが、自らやってみると、とても運動になり、無心でいることができた。慌ただしく過ぎていく日々の中、脈々とつながれてきた文化に触れたような感じがして、心地よい疲労感と充実感で身も心も軽くなった気がした。

備後地方に脈々と受け継がれる伝統芸。記者が一日入門して、その魅力を伝えます。

構えが少し「様」になってきたところで、右手に扇を持ち、左足から床を滑るように進み、両腕を前に差し出す。代表的な型の「シカケ」だ。続いて右足を後ろに引き、左足とそろえながら両手を広げる「ヒラキ」。およそ30分。構えだけでじわりと汗がにじみ、呼吸することさえ忘れてしまいくらいだった。

生徒の藤井敏博さん(57)のけいこも見学した。恋い焦がれ、天皇を追いかけていく女性を演じる仕舞「花筐」。2人の朗々とした謡の音がけいこ場に響く。扇の持ち方、足や腕の運び方、指先まで緊張感を持たせながら2人が舞う姿を見ながら、「日本の文化は美しい」と改めて思った。

「一つひとつの型は抽象的で意味はないが、連続すること

メモ <能と大島家> 室町時代に観阿弥、世阿弥父子が芸術性を確立。桃山時代に能舞台の様式が完成し、江戸時代に各藩が能役者を抱え、繁栄期を迎えた。大島家は明治維新後、初代の七太郎が喜多流宗家に師事し、備後地方に能を普及させた。政允さんの長男、輝久さんで五代目。長女の衣恵さん、次女の文恵さん、三女の紀恵さんも能の普及活動に取り組んでいる。